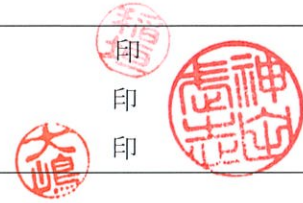


論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏名	竹田 菜由
学位論文名	Relationship Between Oral Function and Social Participation Among Community-Dwelling Older Adults: An Observational Cross-Sectional Study	
学位論文審査委員	主査	稲垣 正俊
	副査	神田 武志
	副査	大嶋 直樹



論文審査の結果の要旨

本研究は、島根県地域在住後期高齢者における口腔機能・口腔衛生状態と社会参加（週1回以上の外出、家族・友人との定期的交流）との関連を明らかにすることを目的とした観察横断研究である。プレフレイル段階では社会的交流の低下や健康行動の停滞が生じ、口腔機能低下（oral frailty/oral hypofunction）へ連鎖し得ることが指摘されているが、客観的口腔指標と社会参加の関連を大規模集団で検証した報告は限られている。そこで申請者らは、島根県後期高齢者医療広域連合の健診データ（2020年4月～2022年3月）を用い、健康診査と歯科口腔健診の両方を受診した75歳以上の地域在住高齢者を対象に解析を行った。初期対象4,709名から重複受診例や欠損データを除外し、最終解析対象は4196名（男性1848名、女性2348名、年齢中央値78.0歳）とした。口腔指標として残存歯数、歯周組織状態、咀嚼機能（グミゼリー15秒咀嚼後の破砕片数）、嚥下機能（連続3回空嚥下時間）、口腔衛生状態、口腔乾燥、歯磨き頻度等々を評価し、社会参加2項目を目的変数としてロジスティック回帰分析を行った。単変量解析では、外出および交流の有無により複数の口腔指標に有意差が認められた。多変量解析の結果、週1回以上の外出は年齢（OR=0.954）、下腿周囲長（OR=1.052）、咀嚼機能（OR=1.021）、口腔衛生状態（OR=0.828）と独立して関連した。また、家族・友人と定期的に会うことは、性別（女性：OR=2.100）、下腿周囲長（OR=1.079）、咀嚼機能（OR=1.021）、嚥下機能（OR=0.988）、口腔衛生状態（OR=0.678）と有意に関連していた。すなわち、社会参加の維持には咀嚼機能および口腔衛生状態が共通して関与し、対人交流の側面では嚥下機能も関連因子となる可能性が示唆された。

本研究は、大規模集団を対象に、口腔機能・口腔衛生と社会参加との関連を示した点で学術的意義が高い。横断研究であるため因果関係の推論が困難であること、健診受診可能な比較的健康な高齢者が中心となる選択バイアス、社会参加指標の妥当性や地域特異性といった限界も認められる。口腔機能および口腔衛生の低下と社会的孤立が並行して進行し得る可能性を踏まえ、歯科口腔保健活動を地域包括ケアの枠組みの中で社会参加支援と統合して展開する必要性が示唆された。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は、客観的に測定した口腔機能・口腔衛生状態と質問紙法による社会参加有無との関連を、地域歯科健診参加者の大規模集団で明らかにした。得られた知見の科学性は高く、審査での発表では、その制約も考察されたものであった。質疑応答での関連する知識も十分にあり、博士学位授与に値すると判断する。

（主査 稲垣 正俊）

申請者は、島根県在住の後期高齢者を対象に、社会参加と口腔フレイル（嚥下機能、咀嚼機能、口腔衛生状態）との関連性を明らかにした。本研究は、地域高齢者の健康寿命延伸に寄与する有用なエビデンスを提示している。最終審査において、申請者は関連する先行研究を十分に理解し、本研究の限界や今後の課題についても的確かつ論理的に説明した。以上の点から、学位授与に値すると判断した。

（副査 神田 武志）

申請者は、後期高齢者集団において口腔機能・口腔衛生と社会参加の関連を検討した結果、咀嚼機能と口腔衛生状態が外出・対人交流の維持に共通して関連することを明らかにした。審査において発表は明瞭かつ説得力があり、質疑応答も的確であった。加えて関連分野に関する十分な学識を有していることから、医学博士の学位授与に相応しいと判断した。

（副査 大嶋 直樹）

（備考）要旨は、それぞれ400字程度とする。